霊〇新〇の献身
2

霊〇新〇の献身　2

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19639070

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 最霊, 本番無し, 霊姦

最霊です。ですが師匠総受けです。今回は本番は無しです。お好きな方はお付き合いください。

ネタバレ
死ネタ注意ではない……だと……！？（つまりそういうことです）

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

霊〇新〇の献身　2

最上啓示が霊幻新隆に取り憑く少し前のこと。
それは彼のほんの気まぐれであった。
（あの少年はどうしてるだろうか）
目の前に横たわる『悪』だったものに、無感動に興味を無くした大悪霊、最上啓示はふとそんなことを思った。
悪霊である彼に距離や時間は些細な事柄でしかない。
最上は少年の気配を追い——そして少しばかり驚いた。
そこは静岡の陸上自衛隊基地内の、……監禁部屋だった。
一面が監視用にガラス張りになった、対超能力者の呪いがかかっている部屋に、真っ白な拘束服を着て、影山茂夫は椅子に座り込んでいた。
「……、……？」
ガラスの向こうでは、自衛隊の科学者が茂夫に質問している。
が、暗い目をした茂夫は、その一切を無視していた。
（なんだ、これは）
最上は一瞬、茂夫を哀れに思い、そして憤った。
これは『異端』への虐待ではないのか、と。
「少年」
虚ろに俯いていた茂夫が、最上の声でばっと顔を上げる。
「最上さん……！！」
茂夫の瞳に光が戻る。
「何故こんなところにいる。お前は何をした？」
「最上さん、お願いです。僕をここから出してください。お礼は僕にできることなら、なんでもします」
要領を得ない。
「少年——」
「これは間違っている」
最上は眉をひそめた。……悪人のような、茂夫の受け答えに、不快感を覚えた。
「僕にはやらなきゃいけないことがある。こうしてる間にも、い

つ、師匠が殺されてしまうか──」
「少年、お前は何をした？」
すがるように茂夫は最上を見て。
「愛する人を、死刑にしました」
やはり要領を得ないことを茂夫は最上に答えた。
らちがあかない、と最上は茂夫の精神世界に入ることにする。
「なんだ、これは……」
前は光と暖かさに満ちていた茂夫の精神世界は、バグったファミコンゲームの中のようになってしまっていた。
あちらこちらで、ぐちゃぐちゃの思い出が割れたブラウン管テレビの中で再生されている。
少年は壊れてしまったのだ、と最上は思った。おそらくその『愛する人』を失ったせいで。
少し最上は同情する。気持ちは分からなくも無かった。
そのぐちゃぐちゃの世界の中で。
一つだけ、綺麗な思い出があった。
夜の草原の中で、明るい髪をした男性が後ろ向きに立っている。最上はその男に覚えがあった。
（あれは、確か、無能力者の──）
最上が近づくと、その男はくるりと振り返って、朗らかに微笑った。

「モブ。俺が◯◯ □□を殺したんだ」

びしぃ、と鏡が破れるように、世界にヒビが入って。
何もかも崩れて、真っ暗な闇になってしまった。
最上は精神世界から出る。
「……」
茂夫は虚ろに足元を見て、何も言わなくなってしまっていた。
「少年」
「……」
「少年！」
「……」

茂夫は何も反応しない。
最上は、何か面白くないことが起こっていることに、顔をしかめた。
確かにこの少年──今はもう青年だが──は善き世界の住民だった。
しかも、強大な力を持つ、いつでも英雄になれるような少年だったはずだった。
それがここまで打ちのめされ、身動きできなくなっている。
（何か『悪』が少年を嵌めたのではないか）
気になった最上は、もう一つの手がかりになるであろう人物、顔見知りの悪霊に会いに行くことにした。

霊とか相談所に最上が顔を出すと、その知り合いの、人の身体に憑依していた悪霊は、驚いて転けた。
「ひどい反応だな」
「おまえ、どの面下げて……！！」
「聞きたいことがある。なぜ影山茂夫少年は自衛隊に捕えられているんだ？」
知り合いの悪霊──エクボはちらっと入り口を見てから、口を開く。
「シゲオの師匠……霊幻が、死刑判決を受けた。シゲオはそれに納得せず暴れたら、自衛隊に拘束されることになった。それだけだよ」
「少年の師匠とやらは何をしたんだ」
エクボは目を逸らす。
「……殺しだよ。屈強な男を３人も殺した。だから死刑になった」
「ほう」
最上の真っ黒な眼窩が笑の形に笑う。
「そんな悪党なら、私が懲らしめてやろう」
「ばっ……！！」
「止めろ！！」
慌てた声を上げたエクボを遮って、外回りから帰ってきた芹沢がタコヤキを取り落としながら両手を構える。
「芹沢やめろ！お前がかなう相手じゃねぇ！！」
「……っ」

芹沢は震えながら手を下ろし、ゴミ箱に駆け寄って胃液を吐き出した。
「お願いします……これ以上霊幻さんに酷いことをしないでください……あの人は、俺が死刑にしてしまったんだ……」
えずきながら芹沢が震える声を出す。
（なんだこれは？）
最上はそこで泣きながら吐く青年が、かなりの術者であることは一目で分かった。
そんな男が、打ちのめされてゴミ箱を抱えて泣いている。
（何が起こっているんだ）
最上は壁に貼られた霊幻新隆のポスターを見る。
茂夫の精神世界で見たよりも、ずいぶんと胡散臭そうに写っているその顔に手を当てて。

かすかな魂の痕跡を辿り、……最上は東京拘置所に行った。

「……」
最上は吐き気を抑えて、悪党どもの顔を見ながら拘置所の中を彷徨う。
目的の人物は、独房の中で座って本を読んでいた。
「お前が霊幻新隆か」
「……最上啓示？」
ぱちくり、と瞬きをするその瞳を見て。
（違う）
最上はひどいショックを受けた。
悪事を働いた人間の目がどうなるのか、最上はよく知っていた。自分やクライアントがそうだったからだ。
（こんな、どこかあどけないような、美しい表情を浮かべることは、できなくなるはずだ）
「霊幻、お前、人を殺したそうだな」
「うん、そうだよ」
「嘘だな」
最上にそう言われて霊幻は肩をすくめる。

「誰かに脅されているのか？言え。特別だ、私が助けてやる。冤罪なのだろう？」
「違うよ、最上さん。冤罪じゃない」
うっすらと微笑む霊幻が、あまりにも美しくて、ドクンと無いはずの心臓が最上の中で跳ねる。
それは死んでから見た中で、最も美しいものだった。
「嘘をつけ。私に嘘が通用すると思うなよ──」
頭を振って最上は霊幻の精神世界の中に入った。
（なんだ、この強固なプロテクトは──！）
記憶のほとんどが意図的に壊され、バラバラにされて隠されているのを最上は感じた。まるでバラバラ死体のような、周到な隠し方だ。
（舐めるなよ、必ず暴いてやる……！）
ぶわ、と場面が一気に裁判所になる。
「──以上、３名の殺害を認めますか？」
「はい、私が殺しました」
霊幻は穏やかな顔で自分の罪を認めているところだった。
（コロシを認めている人間の顔じゃない）
そう苦々しく思いながら最上が霊幻の顔を覗き込んでいると、ふ、と突然霊幻と目が合った。
「最上さん？……ああ、この思い出かぁ……こんなの見ても気分が悪くなるだけだぜ。あっちに行こう」
「こら、おい！」
霊幻に手を引かれて最上は花が咲き乱れる丘に連れて行かれた。
「ほら、ここからの眺めが最高なんだ」
暖かな光が射す気持ちのいい風がふく丘からは、調味市が一望できた。
そこからは茂夫が楽しそうに学校に通ってる様子や、芹沢やエクボが大変そうにしながらも充実した毎日を相談所で送っているのが見えた。
「……今はこうじゃないぞ。お前のせいで影山茂夫は自衛隊に捕えられ、芹沢とやらは後悔にやつれている」
「え……」

景色が揺らいで消える。
「最上さん……頼みがある」
じ、と澄んだ瞳で見つめられ、最上はたじろいだ。
霊幻という男は、最上が大悪霊であるということを知っていても、まるで生きている対等な人間のように扱ってくるのだ。
その距離感が、最上には心地良く、同時に恐ろしいものに感じられた。
「モブを助け出してやってくれないか。モブを説得して欲しい」
「……ほう？」
「こう言えばモブは解放されるはずなんだ。『◯◯ □□を殺したのは霊幻新隆です』と」
「……まあ構わんがね。対価に何を差し出す？悪霊と契約しようとしてるんだぞ、キミは」
「たいか」
「とはいえ私が欲しいものなんて一つしか無い。……生気をもらおうか」
「せ、精気！？」
ばっと霊幻が前屈みになって股間を隠す。
「いや何か勘違いしてるな！？まあ良い、実際に生気を吸えば分かるだろう」
最上は精神世界から抜ける。
と、ゆったりと長いまつ毛に彩られた霊幻の瞼が上がった。
「最上さん……」
「安心しろ、痛くはない。……まあ、大した能力もないキミの生気を頂いたところで、腹の足しにもならんのだが……タダ働きする気はないのでな」
ず、と。
最上の指先が霊幻の胸に沈む。
「あ、ぅっ！？」
座っていた霊幻の足が跳ね、畳を掻いた。
「どれ……魂は、コレか……ん、ん！？」
──震えるほどに、美味であった。
（こんな清らかで、苛烈な愛を含んだ魂など、ついぞ見たことが無

い）
「は、ぁ……っ！もがみ、さ……ぁ……！」
ひくん、と腰を跳ねさせ、霊幻は最上の手を掴もうとしてスカッと空を切る。
「……おっと。これぐらいにしておこうか……ん？」
「……っ、ん……」
生気を吸われる感触に死を予感した身体が、子孫を残そうと反応してしまっていた。
「おやおや、自分で処理するかね？それなら私は席を外すが」
「……っ、ムショ内は、シコるの禁止なんだよ……！！」
それは可哀想だ、と思った最上は。
その手を霊幻の下半身に伸ばした。
「！？何す……！！」
「気持ち良くしてあげるだけだよ。上質なオヤツを貰ったお礼だ。大丈夫だ、キミが声さえ我慢すれば、バレやしない」
「……っ！！」
服を突き抜けて、最上の手が霊幻の陰茎を刺激する。
「……！……っ、ん……！！」
かなり久しぶりのその感触に、霊幻は悩ましく眉根を寄せた。
ごくり。
鳴った喉に最上は戸惑う。なんだか嫌な予感がしたが、それを無視して手淫に集中した。
「は、ぁ……っ、もがみ、さんん……っ！」
「……なんだ」
「服、汚れると、困るから、も、やめ……！！」
ふむ、と最上は少し考えて。
「ならば出さずにイけばいい。出ないように精液の出口を塞いでやる」
「はぁあぁ！？ちょっ……やめっ……」
最上は霊力で射精菅を塞ぎ、そのままゴシゴシとウラ筋を擦り上げて霊幻を追い立てた。
「ゃっ……ゃだっ、て……、イ、っ、〜〜〜〜っ！！！！」
びくん、と霊幻の腰が跳ねる。

直後、霊幻は脱力し、ひく、ひく、と小刻みに襲う絶頂に翻弄された。
生まれて初めての強制メスイキであった。
「スッキリしたかね？」
「わ……かんねぇ、よ、ばかっ……っあ、また……っ！！」
甘イキに耐える霊幻に肩をすくめ、最上は茂夫の元へ向かった。

※

呪いの部屋に佇みながら。
「おい、少年」
「……」
茂夫は反応しない。
「霊幻新隆から伝言だぞ」
ぴくり、と茂夫は震え、ゆるゆると顔を上げた。
「『◯◯ □□を殺したのは霊幻新隆だ』……そう言って欲しいとのことだ」
「アハハハハハ！！」
茂夫が狂ったように笑い出して最上は少し驚く。
「師匠は相変わらずだなぁ……！！」
「……少年？」
く、と笑うように顔を歪めて。

「◯◯ □□は僕が殺しました。もう何百回と言ってるんですけどね」

ねぇ？と茂夫は、自衛官に笑いかけるのだった。

続